



祭

そつと探して

りんご飴の こころを少し

かみちぎつて

灯りに染まる 静かな頬を

そつと探して

夜に浮かんだ 錦冠が

無くなる前に



キニナル!

言葉の由来

夏祭りや学園祭、お祭り騒ぎ、嫌いな人はほとんどいないのではないだろうか？そう、今回のワードは「祭り」です。さて、こんなに明るくて楽しいイメージのある「祭り」ですが、元々は災いをもたらす魔を吊るし上げることを意味する「魔吊り」に由来していると知っている人はいったいどれほどいるのでしょうか？

「魔吊り」の元である動詞系の「魔吊る」の最古の記述は八世紀成立の万葉集までさかのぼります。それは万葉集の21巻4537番で、こんな歌です。

茜さす日の染む穂波願ひてはせめてあらしに敢へて魔吊らむ

(作者不明)

この歌は貧しい農民の歌と言われ、意味は、太陽の光を浴びて黄金色に輝く稲穂が育つように何とか嵐に耐えて魔吊りをしよう、となります。この頃には「魔吊る」という行為が存在し、嵐や流行り病などの災いに耐え抜いた時、それらに打ち勝ったと宣言するために、その象徴となるものを木の幹などに吊るし上げることが言いました。その象徴と言うのは、例えば嵐だとなぎ倒された稲や飛ばされてきた家の壁、流行り病だと病で死んだ人や動物の遺骸でした。ちなみに当時は災いのことを「魔」と呼び、恐れたそうです。後に「魔吊り」は神や祖先の霊を崇めたり、祈願したりする「祭り」へとだんだんと変化していき、少なくとも十二世紀には「魔吊り」の意味も習慣もほとんどなくなったと言われています。

しかし、当時の「魔吊り」とは、言ってしまえば命懸けの勝負の勝利宣言ですから今の「祭り」とはだいぶ価値観が違いますね。今年の「祭り」では「魔吊り」をしていた人々の苦労や喜びに思いを馳せてみてはどうでしょうか？



お久しぶりです！ おからだ大きいですね

まあ周りに比べればどかい方かな？

すげー頼りになりそう あなたといったらはべれなやろ

ぞ、そうかな？

この夏祭りが終わるまでずっと一緒にいてくれませんか……？

(まじでっ)俺なんかやでいいのか？

はい、もちろんですー！(ちなみに、これほど捕まるとはなこ)

「ああ…、祭りか…。」

彼は、彼の住む高層マンションの二十階の窓から鈴虫祭りという名の近所の秋祭りを眺めていた。

彼には友達といえる者は誰一人おらず、そのため祭りというものは彼には最も縁遠かった。下はいつもネオンで明るい、今日は祭りの灯りでひととき明るい。

人々が楽しげに笑いあう様子を想像させるその灯りは、彼に、憂鬱だろうか、羨望だろうか、いや、それらを通り越して嫌悪感なのだろうか、一言ではどれであるとも割り切りがたい感情を抱かせた。

彼はカーテンを閉め、先ほどまでしていたパソコンの作業に取り掛かった。

作業をしながら、彼は、そのまま眠ってしまった。

日付が変わり、午前二時になった。

彼は異様な寒さに目を覚まし、そばにあったリモコンでエアコンをつけようとした。だが、何度それを試みてもエアコンは動かなかった。そういえば、部屋の電気は消していないはずなのに、何故か辺りは暗い。もしかして停電…?と思ひ、カーテンを開けてみると、いつもなら煌々と光っているネオンはどこにも見当たらず、闇の世界が一面に広がっていた。光と喧騒をあまり好まない彼にはそれは非常に魅力的であった。彼はその闇に惹きつけられ、下に降りた。

下は静かで、そして言うまでもなく暗かった。

どこへ行こうというあてもなく彼は歩き続け、気が付くと、先ほどその明るさゆえに彼を不快な気分にした、あの鈴虫祭りの会場まで来ていた。いつにない静けさと暗さは彼に安心感を与え、まるでそこが彼に一番ふさわしい場所であるような気分にした。その時、彼の右肩に何かが触れた。

「あの…。」

その声は一瞬にして彼から安らぎを奪い、彼の中には緊張が走った。

「あなたもここを散歩していたのですか…?」

あまりの衝撃に身動きが取れない彼に、その人は続けて言った。

「暗闇っていいですね。なんかこう、落ち着くっていうか…。」

自分の他に、ただ静けさだけを求めてここに来たやつがいる…、だと?

こいつはただの物好きではなく、本当に俺と同じ理由でここに来たのだろうか?

信じがたかった。だが、そのか細い声には、彼が未だかつて人間なぞには決して感じたことのない親近感を覚えた。

そして彼は、おそろおそろ、しかしかすかな期待を持って、後ろを振り返った。



金魚なんて買うんじゃなかった。

『後の祭り』

「タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン

微かに聞こえてくる懐かしい音

「タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン

部屋から灯りが漏れている

「タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン

あつ ちよつとずれちゃった

「タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン
タン タ タ タン タン タン

おっ 今度はよさそう

この音を屋台見ながら聞かせてほしい

お祭り一ヶ月前の夜

「それは祭のようなもの」

玉が飛び交い、赤いしびきが舞う。辺りは人々の叫びに包まれていた。

また一人、隣にいた男が玉にあたり倒れていった。それはまさに惨劇だった。何故、こんなことが……。

考えてもどうしようもないと判っているながら考えることを止められない。しかし、無駄な事を考えていたら、次に倒れるのは自分かもしれない。しかし、

必死に身を隠し、嵐が去るのを待った。人の叫びからは耳をふさぎ、しかし視界に溢れる赤の色からは逃れられない。気が狂いそうだった。

そんな時、誰かが笑っているのが聞こえた。

こんなときに、いったい誰が……？

と、自分の隠れていた物陰に赤い色の塊が倒れ込んで来た。それが全身に玉を受けた子供の身体だと理解したとき、喉からかすかな悲鳴が漏れた。

その呼気の音が耳に届いたとき、今まで聞こえていたのが笑い声ではなく、必死に抑え込んでいた自分の悲鳴だと理解した。

もう、限界だった。

意味をなさない叫びをあげながら物陰から飛び出す。近くに落ちていた武器を広い、敵に玉を放つ。と同時に嵐の中に投げ出した身に、いくつもの玉が放たれる。

腕に、足に玉が当たり、全身が赤く染まっていく。しかし止まらず、必死に反撃する。さもないれば嵐にのまれ、二度と起き上がれないと判っていたから。

自分が放った玉が数多の敵を赤く染めていく光景は、今思い出すとぞっとする。女も子供も関係なく、動くものすべてに躊躇なく攻撃した。

途中からの記憶はないが、気づくと広場の中央で一人立っていた。

周りには死屍累々。世界から音が消えていた。耳がやられていたのか、本当の静寂だったのかは判らない。ただ、自分が助かったのだということだけは意識した。

が、自分の身体を見下ろすと、全身は真っ赤に染まっていた。とても返るしびきだけではこれほどにはならない。数え切れないほどの玉を受け、しかし倒れずに歯向かうものを皆なぎ倒してきたのだと判った。

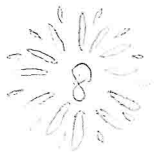
なんて、おぞましい……。

そこで自分の意識は途切れた。

後にその悪魔のごとき戦い方から通り名を与えられる。

『トマト鬼』と。

去年の欧州の田舎町のトマト投げ祭ではっちゃけ過ぎたときの話である。



終わらない魔法

ねえ、知ってる？

お祭りって魔法なんだよ。

お祭りに参加すれば

みんな仲良くなるでしょ？

みんなコロコロ変身するでしょ？

みんなワクワクするでしょ？

シンデレラの魔法は12時で解けてしまうけど

お祭りの魔法は解けないんだよ。

お祭りで仲良くなった関係は

お祭りが終わっても続くもんね。



八月

すぐそこの公園では祭りがおこなわれていた。広いグラウンドを利用して毎年多くの屋台が並ぶ。その様子はこの病室からでもよく見え、列になった提灯の明かりは上から見ると何とも言えず美しかった。

「祭り良かったなあ」

窓の外を見ながら彼は言った。

「眺めてるだけだとなんかさびしいな」

彼は今この病室に入院している。胃に癌が見つかり胃の一部を切除する手術を翌日に控えていた。

「一回寝たら二度と目が覚めないかもっていうのは怖いな」

「何弱気になってんの。全然初期段階だったからちよつと切ってそれで終わりだってお医者さん言ってたじゃん。ちよつと前まで夏は海でナンパとかはしゃいでびんびんしてたくせに」

彼はうつむいたまま返事をしなかった。小学校からのつきあいだが、笑っているときの彼しかほとんど見たことがなかったので弱っている彼をみているのは少々忍びない。

「じゃあ手術が終わったらどつか旅行行こうよ。フランスとか。あんた前に行きたいって言ってたじゃない」

すると彼はすぐに顔を上げた。

「お、気前がいいね。じゃあ初日は・・・」

いつもの彼に戻っていた。この切り替えの早さといいいものにつられて感じる感じといいまで子供だなと思ひながら彼の旅行計画を聞いていた。

時計はもう面会時間終了の八時の十五分前をさしていた。彼は照れ臭そうに言った。

「あのさ、明日はやっぱりこわいから、もう寝るから、あの、寝るまで手握っててくれる？」

私は何も言わず笑顔でそれにこたえた。彼は安心したのかすぐに寝息をたてはじめた。

大丈夫、大丈夫

彼の手から力が抜けていくのを感じて私は急に恐ろしくなった。

ダイジョウブ、ダイジョウブ

外では提灯が灯籠のように妖しく光っていた。

前夜

誰からも、注目を浴びることがなくても、

後ろから支え続けます。

でもほつれたら直してね

『まっぴりね』

コンテスト結果

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
01	そっと探して	0 pt	9 位	0 sp
		カメラワークの妙に酔う今週の表紙です。手元のりんご飴から、いとしい人の頬へ、そして夜空に花火。賑やかなのに無音の映像のような。「錦冠（にしきかむろ）」が難しかった。分かれば、ぱあっと心に花火が開きます。		
02	キニナル！言葉の由来	1 pt	6 位	1 sp
		うっかり信じてしまいそうになる説得力の、2 番正統派、もとい、なんちゃって正統派入ります。「魔吊り」語源説、歌まで創作してがんばったなあ。（注：万葉集は20巻までしかありません。）これだけロジカルに展開できれば、ikgmさんの単位は（以下略）特別賞：民明で賞 from H班（上手いこと（けどウソ）を言っているから）		
03	金魚の会話	13 pt	2 位	1 sp
		しっかり打算の、あったまいちび金魚くん。わははと楽しめました。ひとりだと危ないけれど、ふたりなら生き残れる。あたかも人生のような？？でも、夜店で残った金魚くんたちって、あとどうなるんだろ？？でもって、これはアレですか？ 前回に引き続きシルバーメダリストはすべからく欠席すべし、というフラグ？？金魚対決の感想、聞きたかったです。特別賞：魔性 from B班(ちょろい)イチオシフレーズ：「ちょろいな」		
04	静けさの中の稲光	1 pt	6 位	1 sp
		ラスト気になる！読み手によって、宇宙人登場の異次元ワールドか、運命の女性が登場して、ファンタジックラブストーリーか、ご自由にどうぞということでしょうか。光と闇のていねいな描写で臨場感が醸し出されています。特別賞：振り返ったら奴がいるDE賞 from G班（ホシか？ドッキリか？）イチオシフレーズ：「未だかつて人間なぞには決して感じたことのない親近感」		
05	後の祭り	21 pt	1 位	0 sp
		「後の祭り」ネタは、とつてもとつても多かったけれど、さくっとひとこと、破壊力甚大な、この作品の勝ち！金魚対決を制してゴールド・メダル&イチオシフレーズ大賞です、おめでとう!!! 新人金星!!! イチオシフレーズ：「金魚なんて買うんじゃないかった。」×3 「後の祭り」×2		
		0 pt	9 位	1 sp

06	お祭リーヶ月前の夜	地道な準備の積み重ねがあつてこそ、お祭りというはじける瞬間がある。その準備プロセスに焦点をあてたところに、作者さんのお人柄がほんのり滲みます。音で聞かせた工夫が成功してますね。実体験ベース（作者さん談）ならではのリアリティでした。 特別賞：努力賞（おしかった！4位だった！）
07	それは祭のようなもの	11 pt 3 位 0 sp そこへ来るとは！ ダマされました、はい。 血祭りとみせかけての伏線の張り方も巧みだけれど、戦いの臨場感、スピード感、声なき声にフォーカスした心理描写といった読みどころもお見逃しなく。 金魚対決をよそに独自の視点でブロンズ・メダルです、おめでとう！ イチオシフレーズ：「トマト鬼」
08	終わらない魔法	1 pt 6 位 2 sp 工大祭が終わって思うこと、のような。 語りかけ口調のおかげで、ずっと心に入ってきます。 「続くもんね」とポジティブにまとめたところが、こちよい。 特別賞：そううまくはいかないで賞 from C班（お祭りに参加したからといって皆が仲よくなると思ったら大間違いです（号泣）） 空目賞 from F班（コロコロ、ワクワクが、コロロウキウキワクワクに空目した!!）
09	前夜	6 pt 4 位 2 sp うーむ、これは「妖しく」がバッドエンドのフラグなのか？ 窓から見下ろすお祭りその2は、続きが気になるその2でもあります。 定番の病室少女ではなく、元気いっぱいの彼をベッドに配したところが変化球。文字の大きさとレイアウトでもっと読みやすくなるのに、もったいない。 描写のこまやかさで、応援したい気持ちにさせてくれます。 特別賞：視点がすばらしいで賞 from E班（彼が死んだと思ったから。不安を煽る書き方が良かった） もっとしっかりフラグを建築しま賞 from J班（生存フラグか死亡フラグかビミョーだったから） イチオシフレーズ：「ダイジョウブ、ダイジョウブ」
10	まつりぬい	6 pt 4 位 2 sp TAさん、やさしいね。漢字が違うからアウトかなあとまじよ的には思ったのですが。 そっと影で支えてくれるもの。縁の下の力持ちほど、どっしりたくましくはなくて、心はときどきほつれ気味。 いつもながら、日常のなかから人生の機微をさらりと掬い上げるこの作者さんの着眼が光ります。 特別賞：まつりぬいってなんだったんで賞 from A班（その発想はなかった。そっちの祭りとは・・・） 字が違うけどこの作品、けっこうすきだよ☆賞 from I班（賞の名前に全てを込めました） イチオシフレーズ：「でもほつれたら直してね」